

関川 ましな織

木と、いと、人。

関川というムラでは今もなお、シナノキの皮から取り出した繊維を糸にして布を織っている。古くから紡がれた文化は自然と共存しながら生活に溶け込んでいる。しな織まつりでは、行程の見学、コースター織り体験しな織製品や山の幸の販売を行います。大自然の中、ここでしかできない体験をしてみませんか？

令和8年

10/17

【土曜日】

10:00 - 15:00

10/18

【日曜日】

9:00 - 15:00

入場無料

〈会場〉 関川しな織センター周辺
〒999-7315 山形県鶴岡市関川 222

〈問い合わせ先〉 0235-47-2502 info@shinaori-sekigawa.com 〈web〉 <https://shinaori-sekigawa.com/>

主催：関川しな織まつり実行委員会 / 協賛：関川しな織協同組合、出羽商工会、関川自治会
後援：鶴岡市、あつみ観光協会、中山間関川集落協定

JA庄内たがわ農業協同組合南部支所温海地域センター、鶴岡市あつみ森林組合



木と、いと、人。



植物から繊維を採取し、糸をつくり、布を織るものづくりは、人間の営みのなかでも特に古い技術の一つです。特に「しな布」のような木綿普及以前の素材は、常に自然との共存の中で存在してきました。そして今もなお、関川の人々は自然がもたらす恩恵や四季の移り変わりを感じながらしな布を作り続けています。平成元年にしな布の振興のために始まった「関川しな織まつり」も平成の時代を越えて令和 8 年の開催となりました。文化をつなぐべく更にパワーアップして皆様をお待ちしております。

春

ブナの新芽が芽吹く春は、関川の一番美しい季節。雪が降り積もって固くなる3月ごろ、その雪の上を歩いてシナノキの枝を打ちに行きます。この時期に余分な枝を切り落とすことで、何年か後には、まっすぐで良い繊維をとることができるからです。雪が溶けるころには、山菜が芽を出し始め、5月の初旬には連日ゼンマイを干します。大忙しな毎日のはじまりです。

夏

田植えが終わると、しな布の材料となるオオバボダイジュやシナノギの皮を剥ぐ季節がきます。1年のうち、梅雨の時期しか皮を綺麗に剥ぐことはできません。7月に入ると、しな皮を木灰と12時間ほど煮る「しな煮」と、糠に漬けて川で洗う「しな漬」の工程が始まります。しなの皮を糠に漬ける時、十分に気温が高くなければ効果がうまく出ないので、これも夏にしかできない作業です。



秋

秋

紅葉が美しいこの季節は、豊かな実りの季節でもあります。トチの実をはじめ、原木栽培のなめ茸や舞茸を楽しむことができます。10月になると、温海地域周辺の在来種である“温海かぶ”を収穫し、伝統的な赤カブ漬けも始まります。そして夏の工程で十分に柔らかくなったしなの繊維は、ここからしな裂き、しな績(う)み、しな縫(よ)りなどを経て糸になります。

雪が2メートル以上積もる関川は、昭和30年ごろまで、冬は雪に閉ざされ集落の外に出ることができませんでした。しかし、そうした冬の厳しさがしな布づくりの技術を今に残したとも伝えられています。現在では年間を通してしな織センターで機織りが行われていますが、昔は冬の間に1人で静かに布を織りました。そして、春から秋にかけて丁寧に作った糸を布に織り上げると、ようやく「春が来た」と感じたのだそうです。

めずらしい布と
つくる人々の話

しな織まつりの二日間、普段はあまり見ることのできないしな布づくりの工程を見学することが出来ます。つくり手の声を聞くことのできる機会でもありますので、ぜひお越しくださいませ。

なのではないかと思ひます。

関わりながらおよそ一年を要します。ただでさえ容易ではないこの技術は、世界のどこにもあるわけにはありません。日本以外では、ラオスなど東南アジアの一部の地域で類似の技術を見ることができますが、それとも数えるほどしか存在しないめづらしい布なのです。

「しな布」は、かつては東北地方の山間部を中心にして作られ、日常生活の様々な所で使われてきました。草ではなかく硬い木の内皮をやわらかく加工し、布を織るまでには、季節や天気と深く